

# 誰が記憶を呼び起こせばよいのか～移民社会の「想起する文化」

梶村道子 (ベルリン・女の会)

ドイツの博物館における脱植民地化の動きはすでにお伝えしましたが(『wam だより』Vol.25)、ドイツ政府や連邦議会もドイツ帝国時代の植民地犯罪に向き合い始めました。一方、ドイツに住み、ドイツ社会のナチズムの歴史への取り組みに学んだ移民ルーツの人々が、自らの被害の記憶を、加害者がドイツであると否とを問わず、記録し始めています。しかしそのような運動も、ドイツの「想起する文化」政策とは裏腹に、地元行政との折衝で難航することがしばしばです。以下、最近の動きを報告します。

ドイツ政府は2021年5月、ナミビアに対して、ドイツ帝国が犯した20世紀最初の民族虐殺を認め、赦しを乞い、1.1億ユーロの復興援助を約束しました。ドイツ帝国は1884年から1915年まで現在のナミビアを「ドイツ南西アフリカ」として植民地支配し、1904-1908年には10万に上るヘレロ人とナマ人を殺害、砂漠に追放して渴死させ、あるいは収容所に拘禁して死に至らせました。この植民地犯罪にドイツは1世紀を経てようやく向き合ったのです。しかしヘレロ・ナマ人への個人補償がなされないなど、問題は残っています。

2016年にはドイツ連邦議会が、第一次世界大戦中の1915-16年に起きたオスマントルコによるアルメニア系住民の組織的追放と殺害を民族虐殺だと明言する決議を採択しました。当時ドイツ帝国はトルコの主要同盟国でした。決議は、ドイツ帝国が外交官やキリスト教伝道師から確かな情報を得ていながら、この民族虐殺を阻止しないという不名誉な役割を果たしたとして、「ドイツの特別な歴史的責任を認める」と述べ、アルメニアとトルコの和解に向けた努力と、学術・文化面や市民社会におけるイニシアティブや



ケルン市のアルメニア民族虐殺追悼碑。三角錐の頂点の傷ついたザクロは、トルコ市民社会がジュネサイドを追悼する際のシンボル。アルメニア語、トルコ語、ドイツ語、英語で、「この痛みは私たち全員のもの」と刻まれている。左後方にあるのはドイツ帝国皇帝ヴィルヘルム二世の騎馬像。©Raimond Spekking

プロジェクトの助成を、政府に求めています。この決議を受けてドイツ各地に追悼碑が設けられました。しかしケルン市では碑の公空間での常設が困難となっています。

移民系のグループが今年8月、ベルリンで開いたパネル・ディスカッションで「ドイツ・アルメニア人青年連合」のタリーネ・アツカヤさんがその経緯を報告しています。それによると、ケルン市の有志でつくるイニシアティブ「民族虐殺を記憶

する」が2018年に設置した碑に対しケルン市が撤去を要請、撤去命令の撤回を求める市民側の仮処分申請も行政裁判所が却下、撤去は



パネル・ディスカッションの参加者は約100人。マイクを握っているのが「ドイツ黒人イニシアティブ」のタヒール・デッラさん。その左が「ロマニ・フェン」のタヨ・アウォスシ・オヌトーさん(筆者撮影)

市議会の緊急動議でかろうじて回避されました。「市が碑の設置を渋る背景には同市のトルコ系団体の介入がある」とタリーネさん。トルコ政府はアルメニア人の民族虐殺を認めていません。この催しでは、1937-38年にトルコのデルスィムでトルコ軍に追放・殺害された推定6～7万人のモスレム・アレヴィ派信徒の追悼碑や、ベルリン・ミッテ区に設けられた「平和の碑」(『wam だより』Vol.22, 23)の事例も紹介されました。いずれもケルン市同様、行政当局が関係国による直接・関節の圧力を懸念して、設置認可を躊躇したケースです。

しかし自らの歴史を想起する活動に伴う困難は、新来の移民コミュニティに限りません。ロマ女性グループ「ロマニ・フェン」のタヨ・アウォスシ・オヌトーさんは、ナチスに殺害された欧州シンティ・ロマ追悼碑が、鉄道敷設工事の影響を受ける恐れがあると訴えます。碑の設置は1992年に連邦議会で決まり、多くの反対や抵抗の中で2012年に完成しました。その碑の直下を、ドイツ鉄道の都市鉄道路線が貫通する計画が、昨年発覚したのです。「碑は、私たちに殺された50万人の墓所も同然。600年来ここにいる私たちに、いまだに敬意が払われない」、だから教育を通して社会に史実を理解させることが最重要だとタヨさん。「ドイツ黒人イニシアティブ」のタヒール・デッラさんも、「まず社会全体で脱植民地化の議論を深めねば」と続けます。議論は始まったばかり。追悼碑設置の前に、ドイツには解決すべきことがたくさんある、と。タヒールさんは脱植民地化を進める運動体「デコロナイズ・ベルリン」の理事を務めています。

このパネル・ディスカッションのテーマは、「誰が記憶を呼び起こせばよいのか」でした。それは「想起する文化」の成功の陰で、移民コミュニティやマイノリティの記憶を容易に認めようとするドイツのマジョリティ社会への批判的問いかけです。移民ルーツの市民が24%を占めるドイツで、「想起する文化」の新しい方向性を求める声が移民系コミュニティから上がっているのです。